

平成23年度 矢掛町立山田小学校学校評価書

【 本校のミッション 】		コミュニティースクール推進委員・学校関係者評価委員		学級数	7学級	児童数	76人
①学力をしつかりつける学校 楽しい学校 勉強がわかる学校 ②一人一人が大切にされる学校 ③たくましい体と豊かな心を養う学校 ④子どもの側に立った環境づくりを進める学校 ⑤家庭・地域とつながる学校		学識経験者 小学校PTA 地域コーディネーター 民生児童委員 ボランティア		職員数	13人	家庭数	53戸
		専門評価委員					大学教授

A成果をあげている Bほぼ成果をあげている Cあまり成果をあげていない D成果をあげていない

	中期目標	単年度目標	具体的な計画	達成基準	自己評価	評価	
1	学ぶ意欲を高め理解を深める授業づくりをする。	「教えて考えさせる授業」の充実を図る。	校内研修や授業研究によって指導法を改善する。	アンケートにより、授業が楽しい児童が70%を超える。	アンケートの結果によると、授業が楽しいと感じている児童が87%である。教師も校内研修や授業研究「教えて考えさせる」に取り組み、みんなが分かる授業を目指している。	A	
2	学力をしつかりつける	国語と算数の基礎的・基本的な内容の定着を図る。	T・Tでの朝の学習・わかるタイムを当該学年の国語と算数の基礎的・基本的な内容の到達度が8割以上になるようにする。	当該学年の国語と算数の基礎的・基本的な内容の到達度が8割以上の児童が80%を超える。	朝の学習、わかるタイムでは、ボランティアの協力をえて繰り返し学習することで、意欲的に取り組む姿勢が見られた。基礎的・基本的な内容の到達度は、国語84.8%、算数78.7%で、定着が図れている。さらに、定着するように時間の確保をしていかたい。	B	
3	コミュニケーション能力の育成を図る。	全教育活動の中でコミュニケーション能力を育成する。	自分の考えを書いたり説明したりする場を多く設定する。また、全町で4年生児童を対象に合同授業を実施する。	アンケートにより、自分の考えを書いたり発表したりするのが得意である児童が70%を超える	授業中に説明する機会を多く設定しているが、得意であると感じている児童は65%である。本年度より、全校ヒューリッククラスでのフリートークにも取り組み、全体の場でも発表する機会を設け、自分の考えを話せるようになっている。4年生対象の合同授業は児童にも保護者にも好評で、今後さらに充実させたい。	B	
4	家庭学習の充実を図る。	学年にあった家庭学習を提示し、学習への意欲をもたせたり理解を深めたりする。	家庭学習時間（10分×学年）を考えて家庭学習の内容を考える。読書量を増やす。	アンケートにより、家庭学習時間（10分×学年）以上している児童が、70%を超える。	「家庭学習の手引き」を配付し宿題を図っている。87%の児童が、家庭学習の時間を意識して宿題に取り組んでいる。児童の実態により時間に個人差があることで、自主的な学習の定着を図っています。学期は全校で、1219冊の貸し出しがあった。2学期は、どんどん読書やブックの購入は約1割おり、突然の出来事等に対応する際の時間的・人的不足等で効果的な指導ができると言えにくい現状である。	A	
5	一人一人が大切にされる	特別支援教育の充実を図る。	個々の児童の実態を共通理解し、児童の困り感に応じた指導を目指す。	生徒指導終礼及びケース会議や個別の支援記録表などで連絡を密に応じてケース会議を行い、児童の実態や困り感を共通理解し、児童の心の安定を図ることによって、より細かい個別指導をする。	生徒指導終礼で困り感のある児童への共通理解が図れており、支援が必要な児童に関しては細かく全員にアドバイスしている。また、専任教師の先生に相談を受け、指導に生かしている。しかし、個別に支援を必要とする児童が約1割おり、突然の出来事等に対応する際の時間的・人的不足等で効果的な指導ができると言えにくい現状である。	C	
6	いじめや不登校の生まれない環境整備をし、積極的な対応に取り組む。	何でも話すことのできる雰囲気作りに努め一人ひとりが大切にされる学級づくりや学校づくりを行う。	では、「よいところ探し・クラス遊び」では、「学校が楽しい」と感じる児童が、80%を超える。いじめゼロ。不登校ゼロ。	なかなかなるカードのアンケートで、「学校が楽しい」と感じる児童が、80%を超える。いじめゼロ。	業間・昼休みに仲良くクラス遊びをしたり、異学年同士で遊んだりする姿が多くみられる。総割り班活動では、高学年が低学年の世話を優しくしている。なかよくなるカードでは「学校が楽しい」「どちらともいえは楽しい」を合わせて約9割であった。	B	
7	子どもの心に寄り添う教育相談や支援を行う。	児童の生活を見守り、児童の心のサインを見逃さない努力をする。問題があれば学校全体で解決にあたる。	なかなかなるカードのアンケートを基に教育相談日を学期1回設ける。	教育相談等で児童の話をよく聞き信頼関係づくりができたか。	児童のアンケートによると9割以上が「先生は自分の話を聞いてくれる」と感じている。また、学期に1回教育相談日を設けて児童一人一人と話し相談に応じている。問題があれば、生徒指導終礼等で話し合い、学校全体で対応している。	A	
8	たくましい体と豊かな心を養う	外遊びを奨励し、進んで体を鍛えようとする態度を育てる。	友達と楽しく体を動かす子どもを育てるとともに、自ら進んで体力を向上させようとする態度を育てる。	元気タイム（月2回）を読み、体を鍛えるとともに運動に親しむ子どもを育てる。名人の道の得点が高い児童について表彰する。昨年度の新体力テストの結果から、全国平均に比べ持久力・力強さ・動きを持続する能力が劣っている。それらの強化を図る。そして、今年度との比較をする。	名人の道（元気タイム取り組み）に意欲的に取り組み、個人の総合得点が10点伸びた。	元気タイムを、1学期に2回、2学期に2回実施している。まずは全ての種目を経験できない、よって、得点の集計もできない。元気タイムの時間を使いまして走りをしている児童も多い。朝登校後すぐに市街地をしたり、休み時間で輪車を走らせて走っている児童も多い。元気タイム以外の時間にも「名人の道」に取り組めている。教師だけでなく、上級生が下級生に教えてあげる姿もまた前回のようになってしまった。アンケート結果から、児童は、体育の時間や休み時間等、運動を楽しんでいる。柔軟性・綿跳び等、自分でできそうな運動を紹介している。学校と家とで体力向上を目指している。	B
9	基本的な生活習慣の定着を図る。	「矢掛町あいあは」を毎日唱え意識をもとろそく、「れい」の返事の運動を充実させる。早寝、早起き、朝ご飯の生活習慣を定着させる。	「矢掛町あいあは」を毎日唱え意識をもとろそく、「れい」の返事の運動を充実させる。地域・行政との連携を保ちながら食事に関する意識を高めていく。その後長期休業中にチャレンジクリッキング・親子料理教室を計画する。	元気アップカードによる取り組みでは、80%がほぼ達成できている。保護者・児童のアンケート結果を見ると、「朝には」については90%で食べている。地域・行政との連携を保ちながら食事に関する意識を高めていく。その中で長期休業中にチャレンジクリッキング・親子料理教室を計画する。	元気アップカードによる取り組みでは、80%がほぼ達成できている。保護者・児童のアンケート結果を見ると、「朝には」については90%で食べている。地域・行政との連携を保ちながら食事に関する意識を高めていく。その中で長期休業中にチャレンジクリッキング・親子料理教室を計画する。	元気アップカードによる取り組みでは、80%がほぼ達成できている。保護者・児童のアンケート結果を見ると、「朝には」については90%で食べている。地域・行政との連携を保ちながら食事に関する意識を高めていく。そのため、元気アップカードの結果からも「早寝・早起き」が課題で睡眠時間の確保をやすやすしくするように「テレビ・ゲームの時間」の時間を減らしたり、週1回の睡眠クエストで、すいみんへの意識を高めないように取り組んでいる。また、12月の学校評議会では、すいみんアンケートなどから、睡眠の大切さが伝わるよう指導・啓発する予定である。「矢掛町あいあは」運動については、アンケートから、学校では大半の児童ができるが家庭では今一步となっている。食育に関しては、アスピラ問題の活動・料理作りや夏休みの親子料理教室、チャレンジクリッキングを実施した。	B
10	子ども育成環境づくりを進め立てる	教育環境整備に努める。	保護者と教師と児童が通字路の点検をして、安全マップを見直し、教室に掲示する。	安全マップの見直しをし、教室に掲示。児童への意識付けができたた。	安全マップの見直しをし、教室に掲示。児童への意識付けができたた。	通字路の危険箇所の確認を昨年度の2月の参観日に後に実施し、安全マップの見直しを3月に行ない、教室や廊下に掲示した。アンケートによる100%の教員が安全マップとともに通字路の危険箇所について指導を行なっている。その結果、通字路の危険箇所の把握についての児童アンケートにA又はBと回答する児童が昨年度の72%から87%に増えた。	A
11	学校評議会	視聴覚室・図書室・教室の環境を整える。	教材室の教材リストを作成し、授業で使いやすくする。ICT機器の整備、図書の充実に取り組む。	教材リストが作成できたか。ICT機器を授業で使用したか。図書の電子化ができたか。	教材室の整理、教材写真リストを作成することにより教材が使いやすくなかった。又、6月に教材提示装置を全クラスに設置し、ICT機器がさらに充実化された。	通字路の危険箇所の確認を昨年度の2月の参観日に後に実施し、安全マップの見直しを3月に行ない、教室や廊下に掲示した。アンケートによる100%の教員が安全マップとともに通字路の危険箇所について指導を行なっている。その結果、通字路の危険箇所の把握についての児童アンケートにA又はBと回答する児童が昨年度の72%から87%に増えた。	A
12	家庭・地域	保護者・地域から信頼される学校づくりを目指す。	学校情報の積極的な情報公開に努める。	学校により年間12回以上発行された。年間7回以上は全戸配布する。ホームページ上で学校の情報を発信する。また、ブログを利用し、情報を頻繁に発信する。	学校により年間12回以上発行された。年間7回以上は全戸配布された。毎月2回以上ブログの更新ができたか。	学校によりホームページ・ブログも計画通り刊行・更新できている。アンケートの結果では、情報公開の程度についてAの評価が37%から52%にあがった。また、行事参加の回数についてもAの評価が52%から69%にあがった。今後は、評議会で意見を出し(約1割)の意見を調査して改善を進め、より積極的な情報公開に努めた。	A
13	外部ボランティアとの連携を深める。	外部ボランティアとの連携を深める。	矢掛町学校支援推進本部との連携を深め、学校行事・授業への積極的な参加ができるようになる。「学習アシスト型授業」を実施し、基礎的・基本的な知識・技能の定着を図る。	「学習アシスト型授業」「水やりボランティア」「環境整備支援ボランティア」等、外部ボランティアとの連携の活動を増やし、「支援者リスト」の支援者数が増やされた。	朝学習のスタッフも3名増え、充実度を増している。長寿会の学校支援活動や交流活動でも多くの方に参加している。岡山大学生の茶摘み祭りへの協力、学習支援や読み聞かせ支援等も大きな教育効果を生んでいる。地域の自然や歴史、ミシンの指などとの学習アシストも指導を充実させている。水やりボランティアも14名に増え、きれいな花が子どもたちの成長を止め出しており、より緊密な連携によってより大きな教育効果が期待できる。アンケートでは、ボランティアの来校が楽しいと感じている児童が90%おり、ボランティアを楽しみにしている児童が多いことが伺える。	A	

分析・改善方策

本年度は町全体の行事等で例年より数週間早い自己評価になったので、実践半ばの領域が多い。しかしながら単年度目標、具体的な計画、達成基準等全職員で共通理解し、達成基準を意識しながら実践してきた。「コミュニケーション能力の育成を図る」は、全国学習調査やペナセの調査から数年間にわたって本校の課題となっている。昨年10月から朝学習に読み取りの内容を取り入れ、本年度1学期後半から4年生以上は「フリートーク」「児童朝礼でのスピーチ」に取り組んでいる。即効性はないが継続することにより、力が向かっていくことを期待している。「外遊び～元気タイム」については、達成基準には今一步及ばなかったが、児童の意欲は高まっているのでBとした。「いじめや不登校の生まれない環境整備」は本年度現段階でBとした。基本的な生活習慣の定着等に問題がある児童については、ケース会議を開いたり専門機関に相談したりしていかたい。そしてこの問題については、どの家庭・どの児童にも起こりえることとして捉え、生徒指導終礼、教育相談等で情報交換や対策について協議し積極的な生徒指導を継続していく。

学校関係者評価

中期目標3は、山田小の中心的課題であり、学校生活の様々な機会に自分の考えを話す場を設定したりして、確実に発言の意欲と態度が高まってきた。中期目標5・6については、個別に指導をする児童があり、きめ細かい指導にあたったり突発的な出来事に対応したりする人の不足は明白である。中期目標9の基本的な生活習慣の中でも課題である「早寝・早起き」は、実践の主要な場が家庭にあるため、今後保護者の意識を高めることが大切である。そこで、本年度のPTA評議員会で具体的な計画を作り、来年度から各家庭で主体的に実践できるように方向付ける必要がある。学校外の交流事業をさらに充実させるための教員負担を軽減し、他方で校内の個別指導に取り組むためには、特別支援教育にも明るい特別支援教育加配、ないしは特別支援教育支援員の複数配置が必要不可欠である。

専門評価

評価項目	観点	学校の現状（○優れている点 △改善が望まれる点）	改善の方向性
①自己評価の状況	①取組体制 ②方法の開発・共有 ③実践・実施 ④成果と課題	○ここ数年の継続的な学校評価で浮き彫りになった学校独自の重点課題を中心とする。学校評価の作成を教員が分担してあたり、更に評価を相互に共有することを通して、持続的かつ発展的な学校教育の改革に評価を活用することが試みられている。 △学校評価の作成を教員が分担してあたり、更に評価を相互に共有することを通して、持続的かつ発展的な学校教育の改革に評価を活用することが試みられている。このことは同時に、教員一人ひとりが学校づくりの主体として自らの立場を自覚し、中長期的な教育実践の創造を見通した日々の実践を行うことにもつながっていくと思われる。	・他校との合同授業を行う対象学年を拡大する。来年度は可能な学年（例：3年生）を追加することを目標とし、条件整備の進捗とともにない順次、実施学年を拡大する必要がある。 ・すでに、合同授業の実績のある学年では前年度の成果を生かしつつ、児童の参加をより意欲的・積極的なものとするための取り組み（例えば合同する事前であれば学習の成果の交流やICTを活用した交流など）、事後であれば新たな学年交流の創造などを新たに導入し、稀少な機会を充実させる。
②コミュニケーション力の向上	①取組体制 ②方法の開発・共有 ③実践・実施 ④成果と課題	○教科学習における機会の増加だけではなく、始業・業間・終業などをコミュニケーション力強化の場として捉えたユニークな取り組みが展開されている。 △上のように日常的な機会を豊かにするとともに、少人数かつ固定的な児童集団の特性を克服するための校外学習を新たに導入しているが、その成果は当該学年の児童の表現へのこだわりと自信にも表れる。	・授業時間の増加だけではなく、始業・業間・終業などをコミュニケーション力強化の場として捉えたユニークな取り組みが展開されている。 △上のように日常的な機会を豊かにするとともに、少人数かつ固定的な児童集団の特性を克服するための校外学習を新たに導入しているが、その成果は当該学年の児童の表現へのこだわりと自信にも表れる。
3. 不登校児童生徒の解消	①取組体制 ②方法の開発・共有 ③実践・実施 ④成果と課題	○教科学習における機会の増加だけではなく、始業・業間・終業などをコミュニケーション力強化の場として捉えたユニークな取り組みが展開されている。 △上のように日常的な機会を豊かにするとともに、少人数かつ固定的な児童集団の特性を克服するための校外学習を新たに導入しているが、その成果は当該学年の児童の表現へのこだわりと自信にも表れる。	・授業時間の増加だけではなく、始業・業間・終業などをコミュニケーション力強化の場として捉えたユニークな取り組みが展開されている。
4. 学習不振児童生徒の解消	①取組体制 ②方法の開発・共有 ③実践・実施 ④成果と課題	○自らの学習成績への自信と学校のサポートへの安心感が学習規律のある授業を支えている印象である。いずれの学年の授業でも児童は学習に専念しており、教師が気を許せない緊張感で満ちている。 △自己評価では学校の特色ともいえる取り組みにのみ児童の学習態度の変化の要因を求めており、日々の授業における教師の工夫と児童の態度などから学力向上の要因を分析することは、本校の取り組みを町内外に普及させるためには必要だとと思われる。	・授業時間の増加だけではなく、始業・業間・終業などをコミュニケーション力強化の場として捉えたユニークな取り組みが展開されている。
5. 学校の組織運営	①取組体制 ②方法の開発・共有 ③実践・実施 ④成果と課題	○自らの学習成績への自信と学校のサポートへの安心感が学習規律のある授業を支えている印象である。いずれの学年の授業でも児童は学習に専念しており、教師が気を許せない緊張感で満ちている。 △自己評価では学校の特色ともいえる取り組みにのみ児童の学習態度の変化の要因を求めており、日々の授業における教師の工夫と児童の態度などから学力向上の要因を分析することは、本校の取り組みを町内外に普及させるためには必要だとと思われる。	・授業時間の増加だけではなく、始業・業間・終業などをコミュニケーション力強化の場として捉えたユニークな取り組みが展開されている。
6. 学校と保護者・地域社会等との連携協力	①取組体制 ②方法の開発・共有 ③実践・実施 ④成果と課題	○特別なニーズを必要とする児童に対する教員集団の取り組み及び校外関係専門機関との連携においては、ここ数年の実績に裏打ちされた細心の配慮が行われている。 △専門評議員による聞き取りを通して明らかになってきた課題は予測不可能な突发的な事態に対応する際に生じる教員の不足であった。具体的には、授業時間中に当該児童の対応に専任教員が担当すると、数少ない教員が本務を一時中断して当該学級集団の指導・管理にあたるというものである。このように「玉突き」状態で教員が持ち場をオーバーする体制は、対	